

東京女子大学
学長
森本あんり 氏
Interview

1918(大正7)年の創立以来、
リベラルアーツ教育を掲げてきた東京女子大学。
人間としていかに生きるか、「挑戦する知性」を養うことをめざしています。
2022年4月に学長に就任した森本あんり氏に、
東京女子大学の「学び」についてお話をうかがいました。

大学は
思いもつかない学問に
初めて出会う場で
あるべきです

芝生に映える白亜の本館。文化庁登録有形文化財に登録されているキャンパスのシンボルだ



1918(大正7)年、第一次

世界大戦中であり、スペイン風邪が世界的に猛威を振るう時代に東京女子大学は創立しました。

当時、女子の学校といえば、「良妻賢母」または「実用」という時代です。しかし、

東京女子大学はいすれにも背を向け、独立し

た精神、高い教養、知

女子大であることを決意した
「自覺的な女子大学」

プロテニス選手の大坂なおみさんが、メツセージを書いたマスクを着けたことで話題になりましたね。同じことを私ができるかと振り返れば、きっとできません。けれど、批判を恐れない大坂さんの姿こそ、東京女子大学がめざす「挑戦する知性」だといつも実感しています。男性の陰にかくれ、手伝うような女性ではない。リスクはあっても自ら引き受け、背負つて立つような女性を育てることが東京女子大学のミッションなのです。



創立当初から、志が非常に明確な大学なのです。現代ならともかく、100年以上前の封建的な社会で実現した。これは驚異的であり、今もその志がまったく変わらない、ということに私は感銘を受けます。

第二次世界大戦中には、「出征した男性の替わりになる技術を身につけさせよ」という国の圧力もありました。しかし、東京女子大学はそれを突っぱねました。「最終

性を全面に掲げて出発しました。

1900（明治33）年、万国博覧会が開催されていたパリ。この街で、東京女子大学の創立者である新渡戸稻造と、安井てつは出会いました。新渡戸は万博の審査員としてパリ滞在中、安井は第二次女子官費派遣留学生としてイギリスで学び、帰国途中のことです。

日本の女子教育の必要性を早くから示唆し、名著「武士道」を前年に書き終えたばかりの新渡戸。留学後、「差別のない高等教育を日本の女子に与えたい」という

「人間としていかに生きるか」 に挑戦する知性を養う

東京女子大学の「Something」



第二代学長
安井てつ

A・K・ライシャワーが就任。

女性が高等教育を受けることも一般的ではなかった、当時の日本。その時代に女子大学を設立、しかもキリスト教精神に基づいたリベラルアーツ教育を掲げ、まったく新しい教育を目指したのです。安井は新渡戸の後、二代目学長を務めました。「この学校で学んだ人は、Somethingを得ていくよ」と。折に触れて、こう学生たちに語りかけたといいます。

「Something」とは、キリスト教精神が持つ崇高な雰囲気、「口に出して言えぬが感知しうるもの」を指しています。

安井は、互いに人格的感化を与える関係を教員と学生に求め続けました。

創立から104年、新渡戸、安井らの建学精神は、混迷する現代においてあらためて高く評価されています。

大学1年生に導入教育を教えるのは、博士号をとりたての若い学者ではだめなのです。大所高所から、専門の違う学生にもおもしろいよ

的に国に奉仕できるのは手先の技術を身に付けた代用職員や教員ではない。自分の知性で独立した思考があり、決断ができる、そしてそれに責任を持てる女性を育てたい」という信念を貫いたからです。

先見の明があつたのですが、そのぶん世の中からの風当たりも強い。ふんばるための、その土台、抛りキリスト教だったのです。

現代において、女子大の共学化所としたのが、この大学の場合は共学ではない、女性しかいないところでリベラルアーツを経験することが大事です。東京女子大学もまた、「自覺的な女子大」であり

は増えています。アメリカでも200くらいあつたのが今40校くらいでしょう。しかし、その約40校は女子大学であることを決意した増えています。

「自覺的な女子大」で、志願者もまだ無意識に女性の役割が植えつけられてしまう社会では、植えつけられてしまふ社会では、共学ではない、女性しかいないところでリベラルアーツを経験することが大事です。東京女子大学もまた、「自覺的な女子大」であり

人材より人物」

この理念こそ、まさにリベラルアーツです。日本で、出発点からリベラルアーツの大学としてつくられたのは、東京女子大学と国際基督教大学くらいです。今でこそ「リベラルアーツ」を掲げる大学も増えましたが、いろんな学部があり、その一つが「リベラルアーツ」という例が多いようです。しかし、本来のリベラルアーツは、海外の大学を見てもいずれも小規模です。学生の顔が見える規模であり、すべての学問に「その道」の大がいる。

大学1年生に導入教育を教えるのは、博士号をとりたての若い学者ではだめなのです。大所高所から、専門の違う学生にもおもしろいよ

リベラルアーツは小規模。 学科間の関わりが深い

東京女子大学が創立当初から掲げるのが、リベラルアーツ教育でんな言葉を遺しています。

東京女子大学が創立当初から掲げるのが、リベラルアーツ教育です。初代学長の新渡戸稻造は、この理念こそ、まさにリベラルアーツです。日本で、出発点からリベラルアーツの大学としてつくられたのは、東京女子大学と国際基督教大学くらいです。今でこそ「リベラルアーツ」を掲げる大学も増えましたが、いろんな学部があり、その一つが「リベラルアーツ」という例が多いようです。しかし、本来のリベラルアーツは、海外の大学を見てもいずれも小規模です。学生の顔が見える規模であり、すべての学問に「その道」の大がいる。

大学1年生に導入教育を教えるのは、博士号をとりたての若い学者ではだめなのです。大所高所から、専門の違う学生にもおもしろいよ

続けます。

う、学問の間のつながりが見えるようになることができるのかは、やはりその道の大家。長年研究を続けて来た人でなければできません。リベラルアーツというのは、円熟した教員のアートなのです。東京女子大学は一貫してリベラルアーツの認識を持っている大学です。ですから、大学の規模も小さく、学科間のつながりを深くしておくのです。

高校と 大学の学びは別物 不連続であつて いいと思ひます

リベラルアーツが現代において多く語られるようになった理由の一つに、結局「大学の学部教育の意味は何か」という問題があると思います。大学進学率が10～20%という時代では、卒業すればみんながエリート、専門家でした。しかし現代では、学部を卒業したくらいでは専門家にはなれません。

では、4年間学ぶ意味はどこにあるのか。私は、「ライフロングラナー」、生涯勉強したいと思うような人間を育てることではないかと考えています。学問がおもしろいことに目が開かれていれば、生涯勉強したいと思う。卒業後に「効いてくる」のです。「勉強っておもしろいんだな」というセンス

大学で出会った 学問に圧倒される感覚

「高大接続」や「高大連携」という言葉を最近聞きますが、私は「高大不連続」でいいと思っています。

「学び」としては、高校と大学が

根本的に切れているほうがいい。大学というのは、類推がつかない学間に初めて出会う場所なんですね。

少なくとも私はそうあるべきだと思う。高校の勉強の延長で、大学がおもしろいはずがない。学生たちは、「大学に来たらいいだらう」と入学して来るんです。人が「あ、初めて見た」という景観で、息もつけずに頭をフル回転させて考えている。そんな授業が、私にとって、いい大学の授業なのです。「Wonder」です。

驚きがないと、そもそも勉強というものはおもしろくありません。「まいづた」という畏れのような憧れ、そんなものに出会うのが大學教育の意味だと思います。

高校の延長をさらに勉強するなんて、考えただけでつまらない。



PROFILE

1956（昭和31）年、神奈川県生まれ。東京都立小石川高校、国際基督教大学人文科学科卒業。プリンストン神学院大学院博士課程修了。国際基督教大学副学長を経て現職。著書に『不寛容論』『反知性主義』（共に新潮選書）などがある。



「勉強つておもしろい」というセンスを植え付ける これがリベラルアーツの意味です

大学に入り、新しい学びの世界に圧倒される。そこで大学4年間迷子になつてもよいではないですか。迷子になつて当然だと思います。

大学に入らないと出会えない、絶対にわからない学問はたくさんあります。たとえば「言語学」。「英語が好きだから言語学を専攻したい」などと考へる中高生もいるでしょう。しかし、実はまったく英語とも日本語とも関係ない。言語学とは、ほとんど脳科学であり、「人間が言語を習得していく過程とは、どういったものなのか」という学問です。中高生にそれを理解しようとするととても難しいでしょう。

もちろん、制度上は高校と大学がつながつていいと思います。たとえば、先ほどの「言語学とは」

という一端を教授が中高生に語るのもよいかかもしれません。

東京女子大学も連携する高校と

絶対にわからない学問はたくさんあります。たとえば「言語学」。「英語が好きだから言語学を専攻したい」などと考へる中高生もいるでしょう。

大学に入らないと出会えない、絶対にわからない学問はたくさんあります。たとえば「言語学」。「英語が好きだから言語学を専攻したい」などと考へる中高生もいるでしょう。

という一端を教授が中高生に語るのもよいかかもしれません。

東京女子大学も連携する高校と互いに交流したり、さまざまな話を聞く機会を持つというつながりを大事にしています。高校との連携、また地域の方々ともつながつて新しいプロジェクトをつくつていくという計画もあります。

母国語で語る内容以上に、 外国語で語れるわけがない

最近の「高大接続」という考えは、大学1年になつたときの能力です。中高生にそれを理解しようとするととても難しいでしょう。

日本の英語教育についても思うところがあります。思想を鍛えるためには、まず読む、書く力が必要です。英会話は、あとから学べば十分です。アメリカ人のように発音ができるかどうかなど、グローバル社会においてはどうでもよいことです。韓国人は韓国人、インド人はインド人、日本人は日本人のように発音すればいい。大事なのは、話す「中身」。母国語で語る内容以上のことを、外国語で語

れるわけがありません。ですから、まずは母国語で考える力をつけることが大事だと思っています。

卒業後に効いてくる [Something]

第二代学長である安井てつは、「」の学校で学んだ人は、Somethingを得ていくように」と言い続けたといいます。「Something」は、まだ私はわかりませんし、体感していません。ただ、在学しているうちは意識しない、しかし卒業したら「自分が吸つていた空気がそれだつた」と気づく。それが実はキリスト教の信仰だった——そういうものではないかと思います。後になつて「効いてくる」のです。

人生で大きな決断をしなければならない、その時になつて組み込まれている大局観や倫理観のスイッチが入るかどうか。大きな仕事をする人であればあるほど、危険な決断をしなければいけない。そのとき、カチッとスイッチが入るよう組み込まれているもの。それが「Something」なのだと思います。



チャペル・講堂

アントニン・レーモンド設計の歴史的建造物全7棟が、文化庁登録有形文化財。その一つチャペルでは毎朝礼拝が行われ、講堂ではさまざまな行事が行われる

東京女子大学 キャンパス散歩

緑豊かな芝と木々の中に趣ある建物が調和する、東京女子大学のキャンパス。100年を超える歴史をもつ建物を大切に守りながら、最先端の設備も積極的に導入している。



本館

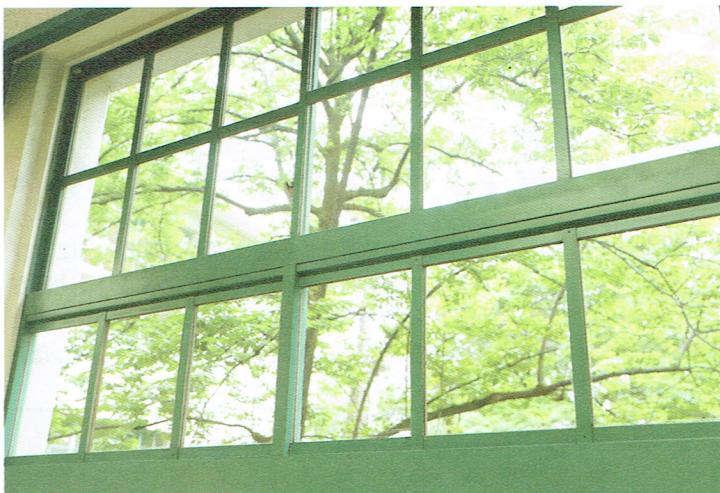
緑の芝生に映える白亜の本館はキャンパスのシンボル。壁に刻まれた標語は「QUAECUNQUE SUNT VERA」「すべて真実なこと」の意（新約聖書フィリピの信徒への手紙第4章8節より）



歴史を感じさせる白壁やロビーの柱。調度品は味わい深い館を醸す

階段の踊り場にも、さりげなくステンドグラスが配置されている。差し込む光が柔らかく、学生たちを包んでいる





窓枠の色は柔らかいグリーン。初代常務理事のA.K.ライシャワー夫人ヘレンの「アメリカ風の明るい雰囲気で」という発案による

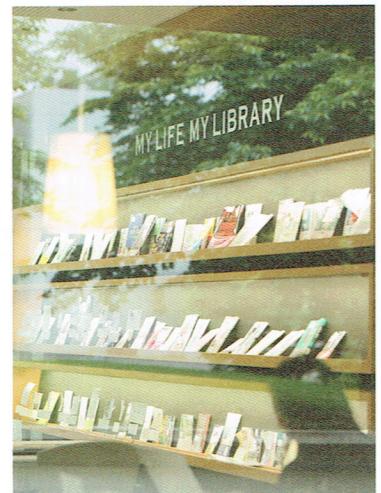


芝生や木々の緑のなか、校舎と校舎を結ぶのは渡り廊下。雨の日の移動も安心。木製の屋根がなんともいえずノスタルジックだ



カフェテリア

カフェテリアはキャンパス内に2カ所。こちらは11号館2階のカフェテリア。ラーメンやヘルシーな定食、魅力的な「おとなのお子様ランチ」など多彩なメニューが揃う。庭と桜の木を臨むテラス席もすてき



アクセス



〒167-8585 東京都杉並区善福寺2-6-1

☎03-5382-6340

JR・メトロ東西線「西荻窪駅」北口から徒歩12分、またはバスで「東京女子大前」下車。

JR・京王井の頭線「吉祥寺」駅北口からバスで「東京女子大前」下車。

西武新宿線「上石神井駅」南口から吉祥寺駅行バス「東京女子大前」下車、または西荻窪駅行バス「地蔵坂上」下車徒歩5分。

図書館1階にあるコミュニケーションオーブンスペースでは、友だちと会話をしながらグループ学習ができる。隣接するリフレッシュルームでは、ちょっとひと息、飲食もOKだ



ホワイトボードやモニターを備え、ディスカッションやグループ学習に使えるスタディースペース。キャンパス内に多数あり、申し込めば自由に使える